

## 『まことの礼拝を知る』 ヨハネ4:15-26

- 4:15 女はイエスに言った、「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」。
- 4:16 イエスは女に言われた、「あなたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」。
- 4:17 女は答えて言った、「わたしには夫はありません」。イエスは女に言われた、「夫がないと言ったのは、もっともだ。
- 4:18 あなたには五人の夫があったが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」。
- 4:19 女はイエスに言った、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます」。
- 4:20 わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。
- 4:21 イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。
- 4:22 あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。
- 4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。
- 4:24 神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。
- 4:25 女はイエスに言った、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」。
- 4:26 イエスは女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。

## ●序論

先週の礼拝のメッセージ。

民族的な隔たりや敵意・確執を超える方のお姿、そこにはこのサマリヤの女性を祝福へと導く、イエスさまの姿を見ました。その招きはこうでした。

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者（受け取る者）は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」

少し立ち止まって、このヨハネの福音書で少し前に見てきた3章の登場人物ニコデモとこのサマリヤの女性との共通点を振り返ります。

ニコデモは、イエスさまから「水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」(3:5)と言われ、今さら母のおなかに戻って生まれ直すのか？と不思議に思いました。

この女性は、「わたしが与える水」というものを、今のどのの渴きをいやす水としかまだ理解していません。

しかし、そういうところから、この対話の中で霊的な真実への気づきへとイエスさまが導いてくださっています。

## ●本論

## Ⅰ. そのままの自分を知る

「その水をわたしにください」の” 渇き” がイエスさまとの距離を縮めます。

イエスさまは更に一步、彼女の本質に近づかれます。

4:16 イエスは女に言われた、「あなたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」。

4:17 女は答えて言った、「わたしには夫はありません」。イエスは女に言われた、「夫がないと言ったのは、もっともだ。

人はしばしば、自分のうちにある、本質的な、つまり” 霊的渇き” に気づかないでいることを、ここで見ています。

先にふれたニコデモがそうでした。

神の霊によって「新しく生まれる」ことの必要に目が開かれていなかったのも、イエスさまが何を言っているのかわからなかったのも、

そしてこの女性は、のどの渇きをいやす水を得られるものなら…、というところから、イエスさまとの対話を通して、自分の本質的・霊的な渇きに、いやおうなしに目を向けられるようになったのです。

自分が今まで気づいてこなかった霊的な渇きに、イエスさまは気づきを与えようと導き語られるのです。

ここにこそ、イエスさまとのほんとうの出会いがあります。

そうして、4:19 女はイエスに言った、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます」。

この女性は、自分のすべてがそのイエスさまの言葉に包まれている経験を通して、この告白に至っているのです。

## Ⅱ. 神が求める礼拝を知る

目の前にいるのが、神の人、預言者で！？、…なぜそんな人がここにいる？ わたしに話しかける？ …そんな思いが彼女の戸惑いの言葉です。

4:20 わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。

4:21 イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。

当時のユダヤ人たちの礼拝が旧約の礼拝規定のもとエルサレムの神殿で守る…という風に、厳格に礼拝のありさまを規定していました。

一方でサマリア人たちは、それを自分たちの側で書き換え、その規定に従いゲリジム山で、という礼拝規定を持っていました。

そこまで語った上で、イエスさまの言葉は「しかし」と続けます。

4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。

” その時が来る、そうだ今きている！” と力強くイエスさまが伝えるまことの礼拝に、私たちの心も向けられていきます。

それは、「霊とまことをもって父（なる神）を礼拝する時」であると。

わたしたちは、旧約時代にあったような動物の犠牲や、さまざまな儀式的規定の縛り、そして決まった会場でなければ、まことの礼拝ができないという時代を生きているではありません。

その旧約時代の儀式礼拝は、真実な救い主イエス・キリストが来られるまでの型にすぎませんでした。

わたしたちは今、イエス・キリストによって「霊とまことをもって父（なる神）を礼拝する時」に生きているのです。

「霊」とは、神さまから与えられた人としてののまごころを込めて…ということです。そして、まことと言われるのは、「偽もの」との対比ではなく、かつての旧約的な礼拝から脱して、まことの礼拝の中心であるイエス・キリストを通して礼拝をささげるということです。

そうして私たちは、イエスさまのチャレンジャーメンと言えるのです。

4:24 神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。⇒ 「アーメン！」と。

そういう礼拝を、使徒パウロはこうも表現しています。

ローマ12:1 兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。

### Ⅲ. イエス・キリストを知る

4:25 女はイエスに言った、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」。

さて、この女性はそこまで語られて、戸惑いもあったのでしょう。

いやいやわたしが聴くところによるとキリストが来られて初めて、全ては明らかにされると、言っています。

いやいや、曲がり間違っても、わたしのもとにキリストが現れるなんてことありえない…と、そう思って言ったのかもしれませんが。

それに対するイエスさまのお答えははっきりしていました。

4:26 イエスは女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。

わたしがあなたの言うキリストだよと、はっきりと答えて下さったのです。

この後の顛末は、また来週ということで。

※最後に)

故・砂辺シゲ姉の救われた当時のお証が（月刊AGNEWS 1963年5月号）

それ（救い）以前は、聖書があっても読みもしない。祈りもしない型だけのクリスチャンでした。しかし心のいやされた今は、真のクリスチャンとしてはずかしくない救いの自信をもつことができました。

あのサマリヤの女性と共通する体験をここに見ることができます。

彼女曰く、それ以前は聖書のそれなりの知識はあっても、救われていない。渴いている。そんな彼女は御言葉そのもの経験をしたのです。

「誰でもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（2コリント5:17）

そしてそれは立派なキリスト教会ではなく、あの五道の辻の天幕伝道集会であったと。ただそこに、宣教師、牧師たち、そして先輩のクリスチャンたちの祈りがあり、何より神の臨在、聖霊の臨在があったのです。

そしてこう語るのです。

私が救主キリスト・イエスの愛を知らされ、聖霊に導かれて恵みを受けましたのは、二年前のことです。その時のことは一生の思い出として忘れることができません。罪の悔い改めにより、魂の救いを経験し、今まで心にあった苦しみや悩みが、洗い流されたように拭い去られ、真の平安と喜びと希望とが与えられました。

その天幕伝道集会で、いつも祈っていただいている大村邦雄兄、そして萩原初枝姉（現在の大村姉）も救われて行ったことをわたしたち見えています。

そんな証しを聴くわたしたちにとって、改めて今日のイエスさまの御言葉はとても大切なチャレンジだとわかります。

4:24 神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。

わたしたちは「アーメン」と答えて、信仰の証を立てていきたいと願います。